

鳥疲れて枝を選ばず

【こんなとき】

- ・ 仕事を選びすぎてなかなか就職が決まらない人に
- ・ 仕事を辞めようかと迷っている人に

【関連】

- ・ すき腹にまずいものなし
- ・ 飢えたる者は食を選ばず

生きてゆくには仕事を選んでいるゆとりはないということのたとえ。鳥が長い時間飛ばば疲れ、木にとまり休む。その際、疲れきっていれば何の木の枝か、いちいち選ぶゆとりはあるまいと人間様が想像した言い回しで、江戸中期の浮世草子『子孫大黒柱』に「鳥つかれて枝をえらばず、人は身過ぎの為なれば、何をしても恥にあらず」とある。「身過ぎ」は生活していくこと、また、その手段の意。生活のためには、どんなことをしても恥にはならないということ。生きるには食べなければならぬが、それが空き腹だと「すき腹にまずいものなし」で食べられれば何でも美味になる。さらに、もっと切迫して飢えに直面した場合になると、「飢えたる者は食を選ばず」となり、食べ物の種類をあれこれいう暇はないということになる。この言い回しは明治期からのものだが、室町期では「飢えては

食を選ばず」と表現されていた。現代は職種も多様になり、その選択の幅も大きくなったが、それも景気の動向などに左右され、いざ窮地となれば選択の自由はないのだ。

図はいろはカルタのもので「新案系」と呼ばれる一種のもの。いろはカルタは、京・大阪を中心に西日本で大正時代まで存続した上方系、江戸で生まれ全国的な展開を見せた江戸系が知られる。しかし、実際には上方でも江戸でもない別の系統のカルタが存在していた。これを新案系という。図はその一種で「すき腹にまずいものなし」。



新案系いろはカルタより
「すき腹にまずいものなし」